付、東三河地方における8～15世紀代の土器

――煮沸具（甕・土鍋）の変遷――

ここ数年来の発掘調査の増加にともない、東三河地方の奈良時代から室町時代（8～15世紀代）にかけての土器の様相が次第に明らかになりつつある。型式設定等については将来に委ねることとし、ここではこれまでの知見をもとに大まかではあるが、8～15世紀代の土器について煮沸具（甕・土鍋）を中心にその変遷過程を、一括遺物を羅列するかたちで整理・概観してみたい[17]。

奈良～室町時代（8世紀から15世紀）にかけての長期間のあいだに、8世紀中葉、11世紀末、15世紀（中葉？）の三つの画期が認められる。

8世紀前葉（～高蔵寺第2号窯式）

諏訪遺跡（新城市豊栄）ＳＢ115出土品[18]があげられる。須恵器は杯身片で時期を特定し得ないが、近在の杉山遺跡（同市杉山）ＳＢ01[19]から高蔵寺第2号窯式に比定される杯蓋とともに甕が出土しておりこの時期と考える。伴出の甕は四種みられる。細身で長胴の体部に、直立ぎみに立ち上がったのち外反する口縁部がつく甕、細身で長胴の体部に、外反する口縁部がつく甕、球形の体部に外反する口縁部がつくものおよびやや肩の張った丸い体部に直立ぎみに立ち上がる口縁部がつくものの四種である。このほか把手の破片がみられる。甕類はいずれも体部外面に縦位のハケ（Ⅰ・Ⅱ）調整が施される。甕$_1$・甕$_2$は7世紀代から継続する器種である。

8世紀中葉～11世紀代（鳴海第32号窯式～折戸第53号窯式）

やや長胴の半球形の体部につよく外反する口縁部がつくもので、内外面に丁寧なナデ（板ナデ）調整が施され平滑な器面の丸底の甕$_3$が、おそくとも鳴海第32号窯式期（8世紀中葉）には出現し、以後、型式変化を遂げつつ折戸第53号窯式期末（11世紀末）に至るまで主要器種として存続する。

形態および伴出遺物からみて、甕$_3$は下記の順で変遷したものと見られる。

公文遺跡ＳＸ01出土品　鳴海第32号窯式期
↓
諏訪遺跡ＳＢ026出土器　折戸第10号窯式期
↓
諏訪遺跡ＳＢ109出土品　井ケ谷第78号窯式期
↓
諏訪遺跡ＳＢ301出土品　黒笹第14号窯式期
↓
（真宮遺跡Ｒ12号住居跡出土品　黒笹第90号窯式期）
↓
西浦遺跡ＳＢ01出土品　折戸第53号窯式┐
郷中遺跡ＳＫ26出土品　東山第72号窯式┘─折戸第53号窯式

つぎに、口縁部の形状に着目して大雑把ではあるが、その変遷についてみる。

豊橋市　公文遺跡　ＳＸ01

新城市　諏訪遺跡　ＳＢ026

新城市　諏訪遺跡　ＳＢ109

新城市　諏訪遺跡　ＳＢ301

岡崎市　真宮遺跡　Ｒ13住居跡

宝飯郡一宮町　西浦遺跡　ＳＢ01

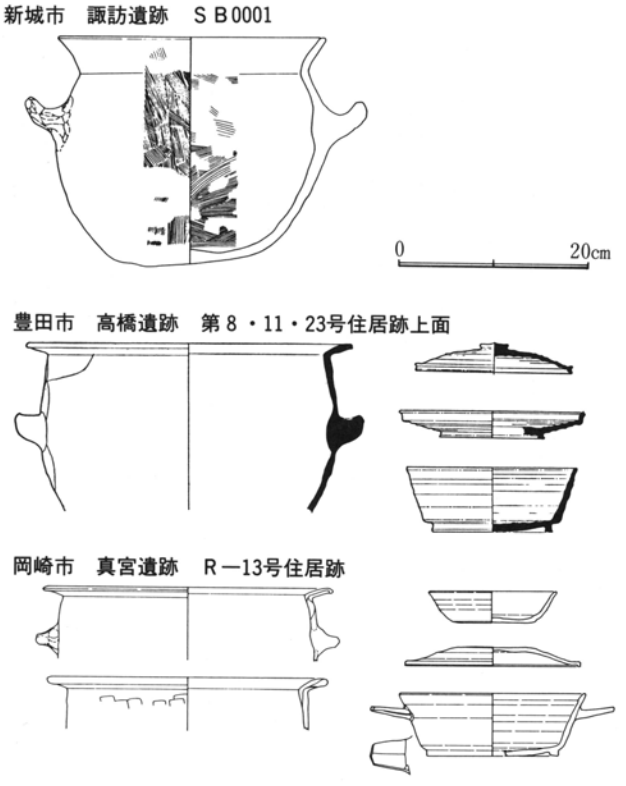
豊川市　郷中遺跡　ＳＫ26

0　20cm

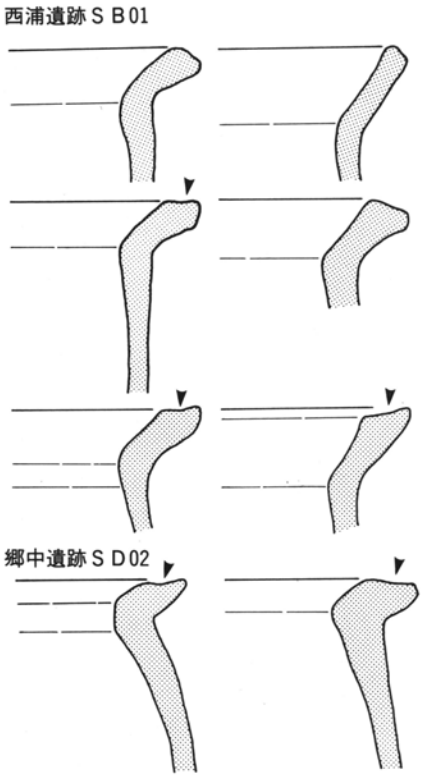
第67図　公文遺跡・諏訪遺跡・真宮遺跡・西浦遺跡・郷中遺跡出土品　（1：8）

鳴海第32号窯式期の公文遺跡ＳＸ01出土品[20]は、管見の限り最古の甕$_3$で、口縁部は外反ぎみに大きく開き、端部は丸くおさめられている。つづく折戸第10号窯式期の諏訪遺跡ＳＢ026出土品[21]では、前代に較べ口縁部は短く、外反ぎみではあるが水平方向に開くものとなっている。なかには外反の度が強く端部が下方を向くものもみられる。井ケ谷第78号窯式期の諏訪遺跡ＳＢ109出土品[22]では口縁部はより短く、水平方向に直線的に開くものとなっているが、前代のものとの区別が難しいものも多々見られる。ついで黒笹第14号窯式期の諏訪遺跡ＳＢ301出土品[23]では、口縁部はより短く厚手で、斜め上方へ直線的に開くものとなっている。端部はまだ丸い。つづく黒笹第90号窯式期の資料はいまのところ東三河地方ではみられないので、地域が幾分離れるが西三河の真宮遺跡Ｒ12住居跡出土品[24]に代替させる。口縁部は前代のものに類似するが、より斜め上方向を開く（外傾）傾向にあって、口縁端面が面をもつ点で異なる。折戸第53号窯式期の西浦遺跡ＳＢ01出土品[25]の口縁部の形状は様々で、ａ．前代同様に外傾するもの、ｂ．肥厚し端面が幅広のもの、ｃ．口縁端部の上端を水平にナデて平坦面をつくるもの、ｄ．口縁端面を上方に向けるもの等がある(第68図)。つづく東山第72号窯式期の郷中遺跡ＳＫ26出土品[26]では、外傾する短い口縁部は分厚く、上方を向く端面は強いナデにより凹み外端は断面三角形状を呈する。おそらくは前代のｃ、ｄの発達形態とみられる。なお、このＳＫ26出土品は、「清郷型」と呼ばれるものに相当するものである[27]。

以上、甕$_3$についてみた。もとより煮沸具は、量的には少ないもののほかにもある。第68図に把手付の堝Ｂを示したが、把手が存する以外は甕$_3$そのものであり、堝Ｂも甕$_3$と同様な変遷を辿ったであろう



第68図　諏訪遺跡・高橋遺跡・真宮遺跡出土品　（１：８）



第69図　甕$_3$の口縁部　（１：８）

ことが予測される。

12世紀～15世紀（中葉？）

土鍋A（伊勢型鍋）は、偏球形の体部に、直立ぎみに立ち上がったのち大きく外反し端部を折り返す口縁部がつくもので、窯業史における中世的表象とされる灰釉系陶器椀類(山茶椀窯)と同時期に出現し、15世紀前葉に至るまで煮沸具の中心となることが、愛知県西部（尾張）の調査により知られている[28]。東三河地方においても発掘調査がすすむにつれて、ほぼ軌を一にして土鍋Aが盛行することが明らかになりつつある。

形態・調整手法および伴出遺物からみて、土鍋Aは下記の順で変遷したものと見られる。

12世紀	宮沢遺跡	ＳＫ154出土品
	郷中遺跡	ＳＤ02出土品
	↓	
13世紀前半	森岡遺跡	ＳＫ01出土品
	↓	
14世紀	杉山遺跡	ＳＫ1368下層出土品
	↓	
15世紀（中葉？）	杉山遺跡	ＳＫ1263出土品

以下、遺構毎に取り上げ、年代順に見ていく。

宮沢遺跡ＳＫ154出土品（12世紀中葉）[29]

口縁部片が２点みられる。ともに端部を内側に折り返すもので、折り返し面は短かく平坦で、水平である。なお、伴出の中世土器皿はロクロ成・整形によるもので、底外面に回転糸切り痕を残すものがみられる。

郷中遺跡　ＳＤ02出土品（12世紀中葉）[30]

１点みられる。端部を内側に短く折り返すもので、丸みを有する折り返し面は内傾する。体部外面ナデ・オサエ調整、内面ナデ調整で、口縁部内外面をヨコナデして仕上げている。

森岡遺跡　ＳＫ01出土品（13世紀前半）

４点みられる。口縁部の折り返し面はヨコナデにより幾分凹む傾向にある。体部外面は左上がりを基調とするハケ調整ののち下半部をヘラ削り調整、内面はナデ調整のち底内面をヘラ削りしている。口縁部内外面はヨコナデ調整。４点のうち１点は胎土を含め異質で、体部外面はオサエ調整による凹凸が顕著で、折り返し面は内湾傾向にある。

杉山遺跡　ＳＫ1368下層出土品（14世紀代）[31]

１点みられる。伴出遺物はないが、その形状が尾張部の14世紀代にみられるものに酷似する。森岡遺跡ＳＫ01に形状・調整手法とも類似するが、胎土は精良で薄手、口縁部の折り返しは薄く頸部とのあいだの段差はほとんどみられない点で異なる。

杉山遺跡　ＳＫ1263出土品（15世紀代）[32]

土鍋Aは１点で、土鍋C_1（内耳鍋）が３点伴出[33]。土鍋Aはより薄手・精良な胎土で、口縁端部の折り返しは短く、折り返し後の強いヨコナデにより端部は内湾傾向にある。調整手法は前代のものと

同じであるが、体部外面のハケは荒い。

土鍋Aはこのような順で変化を遂げたものと解される。なお、杉山遺跡1263については、土鍋Cの盛行段階に含めるべきかもしれない。また、尾張では13世紀後半ごろより、羽釜形の土釜Aが主要器種として加わるが、東三河地方では現在のところ良好な資料を欠き判然としない。ただ、時期幅をもつ溝埋土・包含層中などより出土は確認されており、詳細については今後の調査の進展を待ちたい。

15世紀後半

球形の体部に外反する口縁部がつくもので、口縁部内面に一対の耳が付く土鍋C（内耳鍋）および茶釜型の土釜Bが出現し、以後しばらくの間、この土鍋（内耳鍋）が煮沸具の主力となる。

この時期の資料としては、麻生田大橋遺跡ＳＫ548あげられる[34]。伴出の中世陶器は後期古瀬戸様式の灰釉盤等のほか、常滑窯Ｖ期前半の壺等がみられ15世紀後半に位置付けられるものである。煮沸具には土鍋Cおよび茶釜形の土釜Bがみられる。なお土鍋C（内耳鍋）そのものは上記杉山遺跡ＳＫ1263において土鍋Aと伴出しており、土鍋Cが煮沸具の主要器種として土鍋Aに取って代る時期はさらに遡る公算が大である。また、そのほかの器種の出現・伴出関係については現段階では資料を欠く[35]。

以上、極めて大雑把ではあるが東三河地方の８世紀～15世紀代にかけての土器について煮沸具を中心に整理・概観してきた。これを「変遷図」というかたちにまとめたのが第71図である。

（註）

(17)　ここで用いる編年・年代観については下記の文献による。

楢崎彰一　1983　「付．猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（III）』愛知県教育委員会

赤羽一郎　1984　『常滑焼―中世窯の様相』（考古学ライブラリー23）ニューサイエンス社

藤澤良祐　1984　「“古瀬戸”概説」（『美濃陶磁歴史館報』III）

斎藤孝正ほか　1986　『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ｖ）』愛知県教育委員会

(18)　前掲註(14)に同じ

(19)　前掲註(15)に同じ

(20)　豊橋市教育委員会　1988　『公文遺跡（Ｉ）』（豊橋市埋蔵文化財調査報告書　第８集）

(21)　前掲註(14)に同じ

(22)　前掲註(14)に同じ

(23)　前掲註(14)に同じ

(24)　新編岡崎市史編集委員会　1989　『新編岡崎市史　16　史料考古下』

(25)　宝飯郡一宮町教育委員会　1987　『一宮東部地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

(26)　豊川市教育委員会　1989　『郷中・雨谷』（豊川東部地区県営ほ場整備事業に伴う郷中遺跡・雨谷遺跡発掘調査報告書）

(27)　岩野見司ほか　1974　『新編一宮市史　資料編四』　32頁

なお、この「清郷型」甕といった場合、必ずしもその型式（形式？）設定が明確ではない。野末浩之は宝飯郡一宮町西浦遺跡ＳＢ01出土品をもふくめている。ここで「清郷型」甕という呼称を敢えて取りあげなかったのは、甕$_3$の発達形態として捉え得る公算が大との私見に基づく。

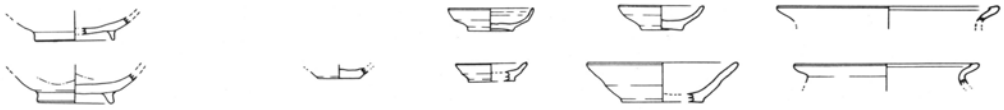
野末浩之　1988　「愛知県内における11～13世紀の煮沸形態」（『愛知県陶磁資料館研究紀要』７）

(28)　㈶愛知県埋蔵文化財センター　1987　『土田遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第２集）

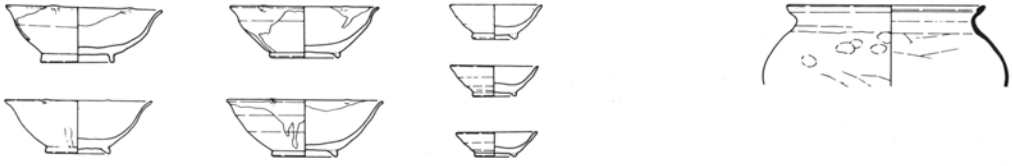
(29)　前掲註(8)に同じ

(30)　前掲註(26)に同じ

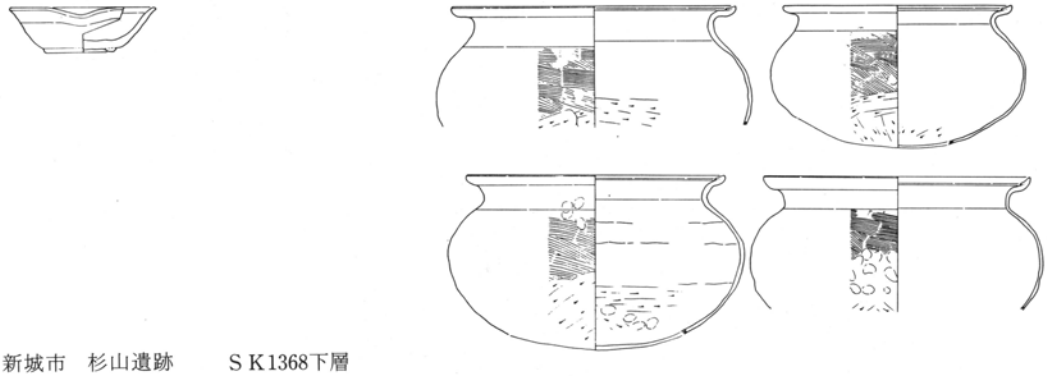
宝飯郡一宮町　宮沢遺跡　ＳＫ154



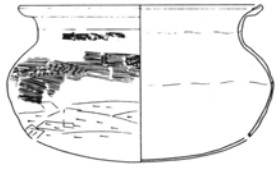
豊川市　郷中遺跡　ＳＤ02



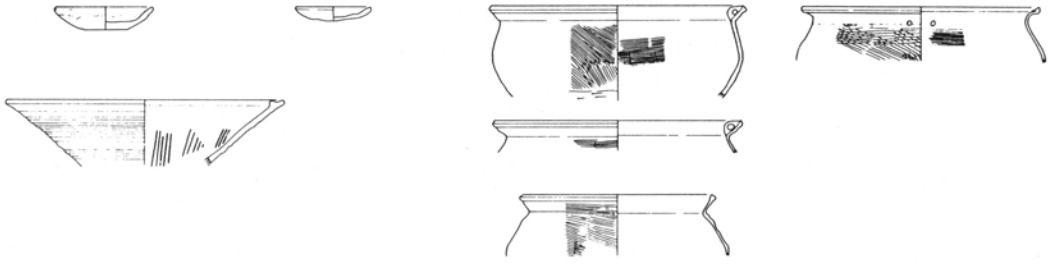
豊橋市　森岡遺跡　ＳＫ01



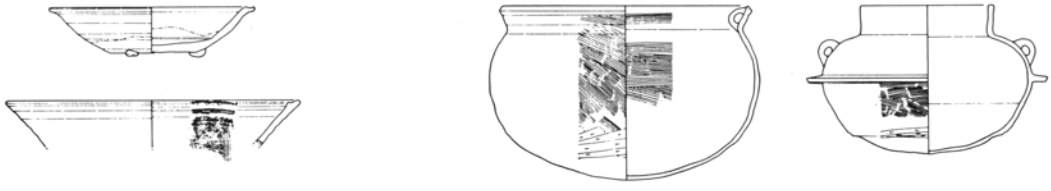
新城市　杉山遺跡　　ＳＫ1368下層



新城市　杉山遺跡　ＳＫ1263

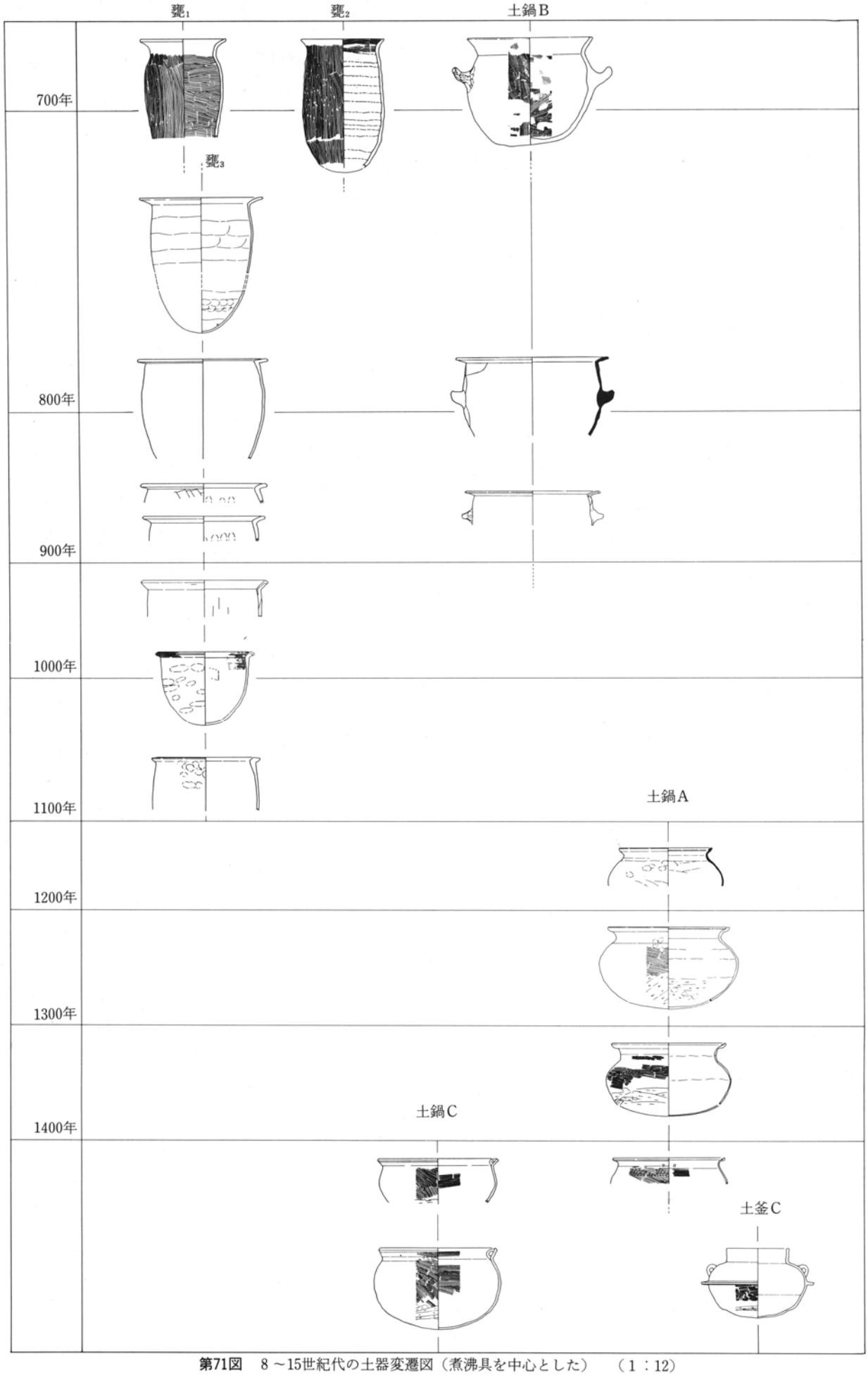


豊川市麻生田　大橋遺跡　ＳＫ548



0　20cm

第70図　宮沢遺跡・郷中遺跡・森岡遺跡・
杉山遺跡・麻生田大橋遺跡出土品　（１：８）



第71図　8～15世紀代の土器変遷図（煮沸具を中心とした）　（1：12）

(33) 土鍋A・C、土釜B等の器種分類は前掲註(15)に基づく。

(34) (財)愛知県埋蔵文化財センター　1991　『麻生田大橋遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第21集）

(35) なお、江戸時代に通有の土鍋D（半球形で体部と口縁部との境を有しない内耳鍋）および土鍋E（皿形の内耳鍋　いわゆるホウロク）の東三河地方における出現時期については資料を欠き判然としない。